

二〇二四年度 卒業論文

親鸞の「宿縁」蓮如の「宿善」の研究

L210017

江見 玲真

目次

序論	1
本論	2
第一章 親鸞における「宿縁」	2
第一節 『教行信証』総序の「宿縁」	2
第二節 親鸞の示す「宿業」について	5
第三節 「宿縁」について	9
第二章 蓮如における「宿善」	11
第一節 『御文章』における「宿善」	11
第二節 「五重の義」について	16
第三節 蓮如の「宿善」について	19
第三章 親鸞と蓮如の「宿縁」「宿善」	20
第一節 親鸞の「宿善」と蓮如の「宿縁」	20
第二節 親鸞の「宿縁」と蓮如の「宿善」の違い	22
結論	24

註

参考文献

序論

「信心」は、親鸞が説いた浄土真宗において、要とされており、浄土真宗の教義では「信心正因」といわれているほど重要視されている。その浄土真宗において重要な、信心の獲得や仏法の出遇いを語る際、親鸞では「宿縁」、蓮如では「宿善」が深く関わっている。親鸞は自身の主著である『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』）の全体の序である総序において、「ああ弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。」（『註釈版』一二三頁）と示している。これは、真実の行と真実の信をえたならば、遠い過去からの因縁をよろこべと示しており、信心の獲得と宿縁の関係を示していると考えられる。蓮如は、『御文章』において「されば弥陀に帰命すといふも、信心獲得すといふも、宿善にあらずといふことなし。」（『註釈版』一一六二頁）と、弥陀への帰命と信心獲得は、宿善であると示している。また、「一つには宿善、二つには善知識、三つには光明、四つには信心、五つには名号。この五重の義、成就せずは往生はかなふべからずとみえたり。」（『註釈版』一一二六―一二七頁）と示しており、浄土往生のための「五重の義」では、一つ目は宿善、二つ目は善知識、三つ目は光明、四つ目は信心、五つ目は名号と示している。これらは、信心と宿善の関係を示していると考えられる。

一般的に「宿縁」といえば、前世からの因縁、「宿善」といえば、前世での善根と、どちらも過去世における行いが重要視されている。その見方からすると、「宿縁・宿善」は過去世の行動、善惡の有無が問題として捉えられる。過去世で、善の行為を行なったものは救われ、悪を行なったものは、今世では救われることはなく、人生が虚しく終わってしまうということになる。しかし、親鸞や蓮如は、この一般的な「宿縁・宿善」の意味とは異なった意味で示している。

私が本論で問題提起するのは、親鸞の示した「宿縁」と、蓮如の示した「宿善」にはどのような意味があるのかということである。以下では、親鸞の示した「宿縁」はどのような意味であるかを、『歎異抄』の第十三章で示される「宿業」に関連させながら考察する。そして、蓮如の示した「宿善」はどのような意味であるかを、『御文章』から考察し、親鸞と蓮如の「宿縁・宿善」について明らかにしていきたい。

本論

第一章 親鸞における「宿縁」

第一節 『教行信証』総序の「宿縁」

親鸞の「宿縁」の意味を考えるにあたり、「ああ弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の淨信、億劫にも獲が

たし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。」(『註釈版』一二三頁)という一文を詳しく見ていく。

「ああ弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし」。この一文について、本多氏は、弘誓を縁という場合は教と行を意味します。教が発遣し、行が喚ぶ。内なる因は信心ですが、教・行、つまり発遣と招喚は、我らにとっては縁なのです。そういう意味で、弘誓が強縁であると言われる。¹

また、

弘誓の強縁が流転と共に歩んで下さっていても、それに出遇えない。出遇ってみれば、出遇うべく歩んでいたに出遇えなかったのだと領かれるわけです。さらに言えば、流転の命の中にあつてどうしても出遇えないのだけれども、絶対に出遇えないようなものに出遇ってみれば、出遇うことが本当に不思議だという感覚が生じるのです。だから「遇い難い」というのは、遇うことなどできないという意味なのです。「多生にも遇いがたい」というのが不可能を意味するということは、何回生まれ変わってみても出遇えるものではないという意味です。²

と述べている。続いて、

本願成就の信心は、曠劫流転の身には発るはずがない。信心を得るということは、それ位の感動なのです。自分の努力で獲たとか、自分が特殊な体験をして獲たとかというのではなく、自分には発るはずがないものなのです。流転の命を生きている自分とは質の違うもの、自己の無始以来の経験とは質の違うものがここに発る。それを浄信ということです。³

と述べている。このことから、外から催す「弘誓の強縁」、内なる因である「真実の浄信」は、本当は遇えるはず、獲られるはずのないものである。しかし、出遇ってみれば、出遇うべく歩んでいたのだと気付かされ、出遇うことが本当に不思議だという感覚が生じるものだということがわかる。

「たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」。この一文について、安富氏は、

「遇行信を獲ば」とは、信心の獲得がまったく偶然性のなかにあることを示している。ここには、万劫億劫を経てきた者に、忽然として時期到来し、本願に遇い、信心を獲得するならば、という値遇の有難さが窺われている。⁴

と述べ、続けて「宿縁とは偶然とみえる値遇の奥に内感される必然であろう。」⁵と述べている。また、本多氏は、出遇いは偶然の如くである。しかし、偶然の如くに出遇う内面には、出遇うのを待っていたような本願の必然がある。⁶

と述べている。行信への出遇いは、偶然性のなかにある。しかし、この偶然の中には、本願の必然がある。本願の必然によって我々は、「弘誓の強縁」や「真実の浄信」、「行信」にたまたま出遇うことができているのだろう。続いて、

宿縁というときの「宿」という字は、一応過去を表します。しかし、現在と切り離された過去ではなく、現在の事実として熟しているような無限の過去なのです。流転の歴史、つまり無明の人生をも包んで歩んできたような背景を表しているわけです。（中略）その遥かに遠い流転の歴史と共に、本願に出遇うべき縁が恵ま

れていたのだという感動、それが「遠く宿縁を慶ぶ」ということでしょう。だから、行信を獲たことにおいて宿縁を慶ぶということは、過去の全ての熏習、全ての経験が、ここに來るべく歩んでいたのだというように見直されるということです。⁷

と示される。これは、運命や奇跡ではないだろう。運命や奇跡では、縁が恵まれることはない。遙かに遠い流転の歴史と共に、本願に出遇うべき縁が恵まれたからこそ、親鸞は「遠く宿縁を慶べ」という感動を示したと考えられる。また、「宿」という字は、過去を意味する言葉であるが、単なる過去ではないこともわかる。このことについて、

現在における本願力との出会いは、限りなく深い過去とつながり、又限りなくはるかな未来ともつながっている。今のこのよろこびは、決して今はじめてのことではないという確信が「宿縁」という表現を見出すのである。そこにはじめて過去・現在・未来にわたる広い視野がひらかれてくると言えよう。⁸

という指摘や、

この総序の「噫、弘誓の強縁は多生にも値ひがたく」という一句のなかに、宿業の凡夫が願力に支えられて、生死を超えるという不可思議に出会ったその感激が凝縮されているのではないか、と私は思います。⁹

という指摘がある。このことから、「宿縁」について考察する際に、単なる過去ではない、過去からの因縁についても考える必要があるだろう。そのため、第二節では、親鸞の示す「宿業」について考察していく。

第二節 親鸞の示す「宿業」について

「宿業」は言葉の意味で言えば、「過去からの業」という意味である。そして、一般的に、「宿業」は、過去世の行いの良し悪しによって、現在の良し悪しが決まるものだという認識が広まっている。しかし、親鸞はそのような認識とは異なる、独自の宿業観を持っている。その親鸞の宿業観は、『歎異抄』第一三条の「本願ぼこり」に対する異義を述べる際に示されている。まず、

この条、本願をうたがう、善惡の宿業をこころえざるなり。（『註釈版』八四二頁）

と「宿業」の語が示されている。「本願ぼこり」が起こるのは、本願を疑っているということであり、それは善惡の一切が宿業の因縁の催しである事実を心得ていないということだと、この一文では示されている。次に、

よきこころのおこるも、宿善のもよほすゆゑなり。惡事のおもはれせらるも、惡業のはからふゆゑなり。（『註

釈版』八四二頁）

と続く。ここでは、善い心も悪い心も起こってくるのはすべて、「宿業」によらないものはないと示されている。

また、藤元氏はこの一文について、源空、聖寛、隆寛の示した「宿業」の課題と比べて、

それに対し『歎異抄』が課題とするのは、「善惡の宿業」つまり人間におけるどのような「善惡」も「宿業」によるという人間存在のあり方そのものである。¹⁰

と述べている。次の一文では、この人間存在のあり方に注目していきたい。

故聖人（親鸞）の仰せには、「卯毛・羊毛のさきにゐるちりばかりもつくる罪の、宿業にあらずといふことな

しとしるべし」と候ひき。（『註釈版』八四二頁）

ここでは、親鸞が、うさぎや羊の毛の先についているちりほどのことでも、すべて自分のつくる罪の宿業因縁による以外のなものでもない、深く自覚するべきだと教えている。これについて藤元氏は

先述したように『歎異抄』における宿業理解の特徴は、宿業存在としての人間のあり方を明らかにする所にあるが、それは個々の人間の現実（卯毛羊毛のさきにいるちりばかりも、つくるつみ）を徹底して見つめていく中に、「宿業存在」（宿業にあらずといふことなし）としての人間のあり方を普遍的に明らかにするものである。¹¹

と述べており、この一文は人間存在のあり方を普遍的に明らかにしているものと示している。また、源氏は、善と感ずることも悪と信ずることも、みな相対的な意味においてなり立つのであって、それぞれの立場にいた善であり悪であり得るにすぎない。かかる相対界の善悪は常に因果の制約を蒙る。善なりと感じたことも因縁によって悪となり、悪と考えたことも因縁によって善となる場合がある。人間の心情や行為は善悪とも周囲の事情や位置の制約を受けないわけにはいかない。また同じ事情のもとにあっても、善をねがいつついつしか悪に陥り、悪を恐れつついつしか善を破壊する。人間の内面生活の過程を外界の事実の上に投射してこれを客観視するとき、おそらくだれでもかかる宿業感を催さぬものはあるまい。¹²

と述べている。人間が考える善悪は、因縁によって常に変化するものであり、心情や行為は周囲の事情や位置に大きく影響を受けるものである。このような普遍的な人間存在を見つめる時に、親鸞の示す「宿業観」が起る

のであると示されている。これらをみると、人間の考える善悪が起こるのは、過去・現在・未来、全てにおいて、「宿業」によるものであると考えることができる。そして、その善悪でさえも、すべて因縁によって、常に変化していることがわかる。また、

願にほこりてつくらん罪も、宿業のもよほすゆゑなり。（『註釈版』八四四頁）

とあるように、第一三章で問題にしている「本願ほこり」であっても、すべて「宿業」によるものだと示されている。続いて、

さればよきこともあしきことも業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまゐらすればこそ、他力にては候へ。（『註釈版』八四四頁）

と、善悪すべてを宿業因縁にまかせ、本願に帰依することが他力の信心だと示されている。これらについて藤元氏は、

このことは、本願の教えにふれている者も、はかり知れない時を重ねて生死・迷いの苦をうみだし続けてきた惑・業のはたらきの中に生きる宿業存在なのであり、そこに一切の例外はないことを示唆している。その上で、宿業存在であるわれらが、この身における「善悪」とその業報への執われから解放され、そのことを通して宿業の身を引き受けつつ、ひとえに本願をみずからのより所として生きることこそ他力の仏道であると教示するのである。¹³

と述べている。第一三条を通して、親鸞の「宿業観」は運命論的な諦めを感じる。しかしこれをみると、宿業存

在である人間は、この普遍的な「宿業」という人間存在を引き受けながら、阿弥陀仏の本願をよりどころとする、それが他力の仏道であり、決して運命論的な諦めではないことがわかる。

親鸞の示した「宿業」は、因縁によって善にも悪にも変化する人間の普遍的な存在を表す言葉である。また、卯の毛、羊の毛の先にいるちりばかりもつくる罪の宿業にあらずということを示しているように、人間は罪の身を生きているのだろう。しかしそのような人間であっても、諦めを持つのではなく、このような「宿業」の身とということをしつかりと受け止め、阿弥陀仏の本願に任せることが重要なのだと考えられる。

第三節 「宿縁」について

第一節、第二節から、親鸞の示した「宿縁」は感動を表しているという特徴がある。また、この感動は「宿業」を受け止めることができるものではないかと考える。

「ああ弘誓の強縁、多生にも値ひがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。」(『註釈版』一二三頁) という一文に示されているように、「弘誓の強縁」、「真実の浄信」、「行信」のどれもが、「多生にも値ひがたく」、「億劫にも獲がたし」、「たまたま」と、人間には本当は遇うことができないものであると、何度も示されている。しかしこれらは、本願の必然によって出遇うことができている。だからこそ、出遇ってみれば、出遇うべく歩んでいたのだと気付かされ、出遇うことが本当に不思議だという感覚が生じるのである。その後、「遠く宿縁を慶べ」と示されていることを考えると、親鸞からすれば、出遇う背景は本当に遠い過

去からの因縁である。遙かに遠い流転の歴史と共に、本願に出遇うべき縁が恵まれたという感動を示す言葉として、「宿縁」が示されていると考えることができる。

また、このような出遇いは、「宿業」を受け止めることができるものだと考えられる。本多氏は、

妄念が破られれば、宿縁を本当に喜ぶことができる。（中略）つまり、単に妄念の命をいきただけではなく、迷っている命の中に、いつもそばに寄り添って呼びかけ、立ち上がるまで待つて用いて、今ここに信心になっている法蔵願心、この法蔵願心の歩みが遠く歩んできて下さっている。そこに現在の自分の背景を本当に喜ぶことができる。¹⁴

と述べている。また

思い起こせばどうにもとり返しをつかない罪業深重の闇の命、深い愚痴の命、そういう命の歴史を背景として、現在に本願と値遇をいただければ、そこに人生が見直され、存在の意味が見直されるのです。（中略）生まれたことも、苦勞したことも、騙されたことも、怨んだことも、すべてが現在の本願の信を育てるためであったと、こういうときに初めて慶べるのです。¹⁵

と述べている。本当は遇うことができないものに出遇え、流転の歴史と共に、本願に出遇うべき因縁、法蔵願心が遠くから歩んできている。今信心として歩んできている。そこに、現在の罪業深重の闇の命、深い愚痴の命は、実は本願の信を育てるためであったと慶ぶことができる。つまり、遙か遠い流転の歴史とともに歩んできている法蔵願心に出遇うことによって、卯の毛、羊の毛の先にいるちりばかりもつくってしまう、普遍的な「宿業」と

いう存在である人間の過去の全ての経験が、我々が出遇うことができない、「弘誓の強縁」、「真実の浄信」、「行信」に出遇うために歩んでいたのだと気づかされる。だからこそ、「宿業」の存在である暗い命を持ち、あきらめてしまふような我々でも、「宿業」をしつかりと受け止めることのできる存在へと変わり、過去が晴れていく。親鸞は、以上のような感動を「宿縁」という言葉で表したのだと考えられる。

第二章 蓮如における「宿善」

第一節 『御文章』における「宿善」

蓮如の「宿善」については『御文章』や『御一代記聞書』など様々な書物に示される言葉であり、「宿善」は「されば弥陀に帰命すといふも、信心獲得すといふも、宿善にあらずといふことなし。」（『註釈版』一一六二頁）と示されるように、信心獲得とともに示されている。蓮如の示す「宿善」を考察する際に、以下では「宿善の機・無宿善の機」と「五重の義」の二つに注目していく。

まず、「宿善の機」について考えていく。第二帖一三通に

しかるにこの光明の縁にもよほされて、宿善の機ありて、他力の信心といふことをばいますでにえたり。これしかしながら、弥陀如来の御方よりさづけましましたる信心とはやがてあらはにしられたり。かるがゆゑに、行者のおこすところの信心にあらず、弥陀如来他力の信心といふことは、いまこそあきらかにしられ

たり。〔註釈版』一一二九～一一三〇頁〕

と示されている。これは、信心を得ることは、弥陀如来のはたらきであり、行者がおこすものではないと示しており、宿善の機があることによって、弥陀如来のはたらきにあうことができる解釈することができる。ここでいう「宿善」とは、どのようなものであろうか。一樂氏は、一般的な「宿善」の意味である、前世での善根と比べ、ここで示されている蓮如の「宿善」を、

しかしながら、蓮如の場合、宿善が有るか無いかを実体的に論じようとするものではないと思われる。すなわち、開発するものという視点から宿善を述べていることが注意される。¹⁶

と述べている。第二帖九通に

これによりて、その阿弥陀如来をばなにとたのみ、なにと信じて、かの極楽往生をとぐべきぞなれば、なのやうもなく、ただわが身は極悪深重のあさましきものなれば、地獄ならではおもむくべきかたもなき身なるを、かたじけなくも弥陀如来ひとりたすけんといふ誓願をおこしたまへりとふかく信じて、一念帰命の信心をおこせば、まことに宿善の開発にもよほされて、仏智より他力の信心をあたへたまふがゆゑに、……〔註

釈版』一一二二～一一二三頁〕

と示されている。これについて稲城氏は、

開発は閉塞に対するもので、閉塞するのは自らの側に属す、この意味において自らの救いの法である名号法は既に与えられていることを意味する。与えられていても、自ら拒絶するから閉塞となるのである。¹⁷

と述べている。また、『高僧和讃』『善導讃』の「われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり」（『註釈版』五九一頁）の発起の左訓に「ヒラキオコス ムカシヨリアリシコトヲオコスヲホチトイフ」（『聖典全書二 宗祖篇上』四四二頁、中）と記されており、「開発」とは、閉塞の対の言葉であり、「発」は昔から既に与えられているということを表す言葉だとわかる。稲城氏は「この与えられているものを拒絶しているのは、自らの側に属するのである」¹⁸と述べており、また、『一期記』の

諸行は自力にてたのみてこそ他力もあらはせと立たり。此一流は始終ひしと他力なり、一心に弥陀をたのむも我賢てたのむにあらず。過去の宿善によりてたのむゆへに始終みな他力なり。（『聖典全書五 相伝篇下』八六七頁）

の文を引用し、「この他力の法を自らの信罪福心の自力執心によって拒絶しているのである。この自力心は他力の法によらなければ除くことは不可能である」¹⁹と述べている。これらをみると他力の法を拒絶しているのは、自力心、「閉塞」であり、これは、他力の法によってのみ除くことができる。そして、「開発」とは昔からの自分の行いによって与えられるものではなく、弥陀如来のはたらき、他力によって与えられていることがわかる。この他力によって与えられる「開発」について一楽氏は、

この意味で、宿善開発という言葉には、信心を得ることができたという感動が込められている。それは同時に、むかしより仏智のはたらきの中にありながら、それに気づかず過ごしてきた我が身であったことへの懺悔である。それ故、宿善開発とは、「宿善のもよおし」とも述べられるように、信心の獲得が仏智のはたらき

に支えられて成り立つことをおさえる言葉である。 20

と述べている。過去から阿弥陀仏より与えられていたものを、今まで自力心によって拒絶してきた。しかし、阿弥陀仏はその自力心を除こうというも他力の法によつてはたらきかけていた。そのことに気づけなかったことへの懺悔。そして、いつも信心を獲得するために過去よりはたらきかけ、共に歩んできている阿弥陀仏への感動を示したのが「宿善開発」という言葉であると考えられる。

次に「無宿善の機」について考えていく。第三帖一二通に

それ、当流の他力信心のひととほりをすすめんとおもはんには、まづ宿善・無宿善の機を沙汰すべし。さればいかにむかしより当門徒にその名をかけたるひとなりとも、無宿善の機は信心をとりがたし。まことに宿善開発の機はおのづから信を決定すべし。されば無宿善の機のまへにおいては、正雑二行の沙汰をするときは、かへりて誹謗のもととなるべきなり。この宿善・無宿善の道理を分別せずして、手びろに世間のひとをもはばからず勸化をいたすこと、もつてのほかの当流の掟にあひそむけり。〔註釈版〕一一五八―一一五

九)

と示している。これは、当流の教えを勸化するものは、宿善・無宿善の有無をよくわかった上で勸化するようにと述べられている。『蓮如聖人御一代記聞書』本、一〇五条に

時節到来といふこと、用心をもしてそのうへに事の出でき候ふを、時節到来とはいふべし。無用心にて出でき候ふを時節到来とはいはぬことなり。聴聞を心がけてのうへの宿善・無宿善ともいふことなり。ただ信心

はきくにきはまることなるよし仰せのよし候ふ。(『註釈版』一二六五頁)

と示されている。ここでは、聴聞をこころがけているかいないかに、宿善・無宿善の有無をのべている。これについて、稲城氏は、

あたかも水のほしくないものに水を飲めと言うが如くである。辛いものの嫌いな人に辛いものを強要するが如くである。それ故、このような人に強要すると、争いとなり、さらに仏法、念仏の方を誹謗することになる。逆に相手に謗法罪を犯さしめることになる。²¹

と述べている。このことから、蓮如が宿善・無宿善を明らかにした上で、勧化することを進めたのは、他者に阿彌陀仏の教えを強要しないようにするためであったと考えられる。強要することによつて、争いが生まれ、仏法、念仏を誹謗するものが生まれることを恐れたのではないかと考えられる。

また、無宿善の語は、宿善・無宿善の有無以外にも示されている。第四帖八通に

ただし無宿善の機にいたりてはちからおよばず。しかりといへども、無二の懺悔をいたし、一心の正念におもむかば、いかでか聖人の御本意に達せざらんものをや。(『註釈版』一一七七頁)

と示されている。宿善・無宿善の有無とこの一文について一楽氏は

誰か特定の人を無宿善の機であると決めつけ、排除しようとするのではない。どこまでも呼びかけ続けているところに蓮如の姿勢がある。教えを聞きながら教えに遇えない、弥陀のもよおしの中にありながらもよしにあずかれない、そういう者に対しての厳しい呼びかけが無宿善という言葉にはある。その意味で無宿善

と知らされることは、これまでも教えの中にありながら教えに背いていたという、我が身に対する深い懺悔をともしなうものである。²²

と述べている。このことから、蓮如は宿善・無宿善の有無によって誰かを排除しようとしたわけではなく、阿弥陀仏のもよおしの中にありながら、あずかれない者への呼びかけであり、そして、これまで教えに遇いながら、教えに背いてきたことに対する懺悔を示していたと考えられる。

第二節 「五重の義」について

第二帖十一通の「五重の義」と言われる一文について考えていく。「五重の義」とは、

これによりて五重の義をたてたり。一つには宿善、二つには善知識、三つには光明、四つには信心、五つには名号。この五重の義、成就せずは往生はかなふべからずとみえたり。（『註釈版』一一二六―一一二七頁）と示されているところだ。ここでは、宿善、善知識、光明、信心、名号の一つでもかければ往生はできないと言われる。また、この一文は「十劫安心」と「善知識だのみ」の異義にも触れている。十劫安心については、

これさらに、弥陀に帰命して他力の信心をえたる分はなし。さればいかに十劫正覚のはじめよりわれらが往生を定めたまへることをしりたりといふとも、われらが往生すべき他力の信心のいはれをよくしらずは、極楽には往生すべからざるなり。（『註釈版』一一二六頁）

とあり、善知識だのみに対しては、

そもそも、善知識の能といふは、一心一向に弥陀に帰命したてまつるべしと、ひとをすすむべきばかりなり。

（『註釈版』一一二六）

帰するところの弥陀をすて、ただ善知識ばかりを本とすべきこと、おほきなるあやまりなりとこころうべきものなり。（『註釈版』一一二七頁）

と示されている。このことから「五重の義」は、これらの異義に対し説かれたものだと考えられる。

「五重の義」では第一に、「宿善」が挙げられる。「宿善」について稲城氏は

宿善の善はいかなる意味においても絶対的なものではない。（中略）それ故、宿善は獲信の上から過去に向かつての法に導くあらゆるものを包括するのである。否定媒介の否定するものは否定されるものを離れては成立しない。このような意味において宿善は因ではなく縁である。^{2,3}

と述べている。宿善は法に出遇う、信を獲得することができたという過去からの縁である。そして宿善は信心獲得の因ではなく縁だということがわかる。

第二に善知識があげられる。「五重の義」の文に

されば善知識といふは、阿弥陀仏に帰命せよといへるつかひなり。宿善開発して善知識にあはずは、往生はかなふべからざるなり。（『註釈版』一一二七頁）

と善知識の正しいうけとりかたを示している。これについて稲城氏は

この善知識も宿善と同じように縁であって因ではない。この獲信への因と縁の混同を明らかにされたのが五

重の義をたてられた理由である ²⁴

と述べており、「五重の義」が、「善知識のみ」などの異義に対して説かれたものだと確かめることができる。

第三に光明が挙げられる。光明は摂取と照育と破闇に分別される。鎌田氏はここで示される光明について、

蓮如上人の光明の見方には照育の光明すなわち信前の光明はほとんどみられず、すべてといっているほど摂

取の光明を言われています。 ²⁵

と述べており、摂取の光明だと考えられる。

第四に信心が挙げられる。信心は「信心正因」といわれるように、往生できるただ一つの正因である。「十劫安心」などのようなものではなく、信心が正因であるということを示している。

第五に名号が挙げられる。ここでの名号は称名である。信心の後に名号が示されていることから、称名は報恩であると考えられる。

「五重の義」の関係は、宿善・善知識・光明は信心を獲るための縁であり、信心は正因、名号は称名であり報恩であるということが考えられる。稲城氏は、

過去の宿善なくして善知識に遇うことは不可能である。善知識に遇って信心歓喜の身となることは光明の縁によるのである。光明の妙用によって信心獲得の身となる。信心獲得から必具名号の称名となるのである。

²⁶

と述べており、前後の関係が重なりあっていることがわかる。以上のことから、「十劫安心」や「善知識のみ」

の異義に対して、信心のみが因であり、他は縁であり報恩であると示したのが「五重の義」だと考えられる。また、「宿善」は獲信の上から、過去から法に導かれるさまざまな事柄を包括するものであると考えられる。

第三節 蓮如の「宿善」について

第一節、第二節から、蓮如の示した「宿善」は反省、そして感動を表しているという特徴があると考ええる。「宿善開発」「無宿善」と示されるように、過去から阿弥陀仏より与えられていたものを、今まで自力心によって拒絶してきたこと、阿弥陀仏のもよおしの中にありながら、教えに背いてきた。しかし、阿弥陀仏はその自力心を除こうといつも他力の法によつてはたらきかけていた。そのことに気づけなかったことへの懺悔。そして、いつも信心を獲得するために過去よりはたらきかけ、共に歩んできている阿弥陀仏への感動を表していると考えられる。

稻城氏の述べたように、「宿善」は過去に行つたさまざまな事柄は、法に導かれるためのものだったとあらゆるものが包括される。これは、慶びであり感動ではないだろうか。親鸞の示した「宿縁」でも述べたように、これまでの行い、我々の命は全て、本願の信を育てるためのものであったという慶びがある。「宿業」という存在である人間の過去の全ての経験が、我々が出遇うことができないものに出遇うために歩んでいたのだと気づかされる。だからこそ、「宿業」の存在でも過去が晴れていくという感動である。そして、「宿善」も同じように、過去に行つたさまざまな事柄は本願の信を育てるためのものであった気づくことの慶びであり、感動を表しているのではないかと考えられる。

また、桐溪氏は「宿善」の語の注意すべきこととして、

ここで最も注意すべきことは、宿の字が示す如く、ただ獲信に因縁がある善ということではなく、獲信の立場から反省した時の獲信の因縁であるという点である。従って、獲信に向かって動いている立場での善根という意味ではなく、獲信者が自己の今の獲信に因縁のあった良縁を反省してそれを宿善というのである。²⁷と述べている。反省、感動を表している「宿善」は、獲信者の立場から述べられているということを注意する必要がある。そして、「五重の義」で示されるように、「宿善」は信心獲得のための縁であることを注意しなければいけない。一つでもかけてしまうと往生はできないとされる「五重の義」であるため、宿善、善知識、光明、信心、名号の全てが往生の因であるように見えるが、往生の正因は「信心」のみである。ここで示される「宿善」も桐溪氏が述べたように、獲信者の立場から述べられているのだろう。以上のように、「宿善」は獲信者の立場から示されている、反省であり、感動であると考えることができる。

第三章 親鸞と蓮如の「宿縁」「宿善」

第一節 親鸞の「宿善」と蓮如の「宿縁」

親鸞は「宿善」という言葉を用いたことはないが、『歎異抄』に「宿善」が示されている。「よきところおこるも、宿善のもよほすゆゑなり。」（『註釈版』八四二頁）ここでいう宿善は「宿業」とともに述べられており、よい

おこないをしようと思うことは、宿善という縁によるものだとし示していると考えられる。また、宿善が示された後に、「悪事のおもはれせらるるも、悪業のはからふゆゑなり。」(『註釈版』八四二頁)と示されていることから、「悪業」の対照的な言葉として「宿善」が述べられたと考えられる。このことから、親鸞の「宿善」は、蓮如の示した「宿善」のような意味では述べられていないと考えられる。

蓮如は「宿縁」という言葉を『御文章』や『御一代記聞書』などに示されている。以下では『御文章』に示される「宿縁」について考えていく。

- (1) かかる不思議の宿縁にあひまゐらせて、……(『註釈版』一〇九四頁)
- (2) まことに先世の宿縁あさからぬふゑとおもひはんべるべきなり。(一一〇九八頁)
- (3) 宿縁あらんひとは、これをききてすみやかに今度の極樂往生をとぐべし(一一三八頁)
- (4) まことにもつて不可思議の宿縁、よろこびてもなほよろこぶべきものか。(一一五六頁)
- (5) またきくひとも宿縁あらば、などやおなじころにならざらんとおもひはんべりしなり。(一一六八頁)
- (6) これすなはち往昔の宿縁あさからざる因縁なりとおぼえはんべりぬ。(一一八七頁)

このように、「宿縁」という言葉を多く用いられている。これらを見ると、一般的な前世からの因縁という意味合いや蓮如の示す「宿善」、親鸞の「宿縁」の意味合いでも示されていると考えられる。(2)(6)は一般的な意味合いであり、(3)(5)は「宿善」の意味合いであり、(1)(4)は「宿縁」の意味合いだと考えられる。一般的な意味合いで示される「宿縁」であるが、ここでは他力による因縁である。また、固定的な意味合いでは使わ

れていないと考えられる。先世の宿縁を述べた後、「それも後生を一大事とおもひ、信心も決定したらん身にとりてのうへのことなり。」(『註釈版』一〇九八頁)と示されており、獲信者の立場から述べられていることがわかる。つまり、蓮如の「宿縁」には自力による因縁ではなく、阿弥陀仏よるはたらき、他力の法による因縁が示されていると考えられる。そして、蓮如の「宿善」、親鸞の「宿縁」の意味合いも含まれていると考えられる。以上のように、蓮如は「宿縁」ということを様々な意味で使用している。そしてそのどれもが、他力のはたらきによるものであるという意味合いが含まれていると考えられる。

第二節 親鸞の「宿縁」と蓮如の「宿善」の違い

第一章、第二章では、親鸞の「宿縁」と蓮如の「宿善」について考察してきたが、それぞれ違いがあるのだろうか。親鸞の「宿縁」は感動である。我々が出遇うことが出来ないものを、不思議に出遇うことができている。遙かに遠い流転の歴史と共に、本願に出遇うべき縁が恵まれている。遙か遠い流転の歴史とともに歩んできている法蔵願心に出遇うことによって、「宿業」という存在である人間の過去の全ての経験が、我々が出遇うことができるものに出遇うために歩んでいたのだと気づかされる。だからこそ、「宿業」の存在である暗い命を持ち、あきらめてしまうような我々でも、法蔵願心に出遇うことによって、「宿業」をしっかりと受け止めることのできる存在へと変わり、過去が晴れていく。そのような感動を「宿縁」という言葉で表している。蓮如の「宿善」も慶びであり感動である。信心を獲得するために阿弥陀仏が過去よりはたらきかけ、共に歩んできている。過去に行

ったさまざまな事柄は本願の信を育てるためのものであった気づくことの慶びである。このように、「宿縁」「宿善」は、今信心を獲得するため、阿弥陀仏が遙か遠い流転の歴史とともに歩み、はたらきかける他力への同じ慶び、感動である。そして、「宿業」という人間存在である我々が、他力にあずかることで、過去に行ったさまざまな事柄は本願の信を育てるためであったと、暗い過去が晴れるという同じ慶び、感動を示していると考えられる。

親鸞は「宿縁」を「遠く宿縁を慶べ」というように一度しか使用していない。それに比べ蓮如は「宿善」を多く使用している。先に述べたように、「宿縁」と「宿善」は同じ慶びであり感動である。しかし蓮如は「宿善」を慶びや感動以外の意味合いで使用している場合もある。「五重の義」での「宿善」は慶びや感動があまりくみ取れない。「十劫安心」や「善知識だのみ」の異義に対するものとして「宿善」を示したようにも解釈できるだろう。

蓮如は真宗教団の宗主という立場がある。そこでは、異義に対して真宗の正しい教義を示していかなければならない。また、伝道も行っている。伝道では、真宗の教えを広め、真宗門徒を増やすとともに、他宗派との軋轢が生まれるだろう。この軋轢によって他宗派と争はない、そして、仏法、念仏を誹謗するものが生まれなために、「この宿善・無宿善の道理を分別せずして、手びろに世間のひとをもはばからず勸化をいたすこと、もつてのほかの当流の掟にあひそむけり。」(『註釈版』一一五八―一一五九)と示したと考えられる。このように蓮如は、真宗教団の宗主という立場から、様々な場面で「宿善」という言葉を示している。しかし、「五重の義」や「無宿善」についてみると、どれも、真宗の正しい教え、本願の教えをより多くの人に広めたいという思いが込められている。また、仏法、念仏を誹謗する人が生まれなために争いを避け、阿弥陀仏のもよおしの中にありな

がら、あずかれない者への呼びかけ、そして、これまで教えに遇いながら、教えに背いてきたことに対する懺悔を示している。それは、獲信者の立場からの伝道であって、根本には、阿弥陀仏の救いに出遇えたことへの慶び、感動があるのではないかと考えられる。

以上のように、親鸞の「宿縁」は慶び、感動である。そして「宿縁」は他の意味合いで示されることはない。蓮如の「宿善」は慶び、感動である。しかし「宿善」は、慶びと感動以外の意味合いで使用していると考えられる。しかしそれらは、真宗教団の宗主という立場からのものであり、根本には、慶び、感動が含まれていると考えられる。

結論

序論では、親鸞の示した「宿縁」と、蓮如の示した「宿善」にはどのような意味があるのかということを課題とした。第一章では、親鸞の「宿縁」について考察した。第一節の『教行信証』の序文に示される「宿縁」と第二節の『歎異抄』に示される「宿業」から、親鸞の示した「宿縁」は、「宿業」という存在である人間の過去の全ての経験が、我々が出遇うことができない、「弘誓の強縁」、「真実の浄信」、「行信」に出遇うために歩んでいたのだと気づかされ、阿弥陀仏の救いに出遇うことによって、「宿業」をしつかりと受け止めることのできる存在へと

変わり、過去が晴れていくことへの感動であると考えられた。

第二章では、蓮如の示した「宿善」について考察した。第一節の「宿善の機・無宿善の機」と第二節の「五重の義」から、蓮如の示した「宿善」は反省であり感動である。阿弥陀仏のもよおしの中にありながら、今まで自力心によって拒絶してきた。しかし、阿弥陀仏はその自力心を除こうといつも他力の法によってはたらきかけていた。そのことに気づけなかったことへの懺悔であり、信心を獲得するために劫々の昔よりはたらきかけ、共に歩んできている阿弥陀仏への感動である。また、過去に行ったさまざまな事柄は本願の信を育てるためのものであった気づくことの慶びであり、感動を表している。そしてそれらは、獲信者の立場から示されるものである。また、「宿善」は往生の因ではなく、縁であることを注意しなければならない。

第三章では、親鸞と蓮如の「宿縁」と「宿善」にはどのような違いがあるのか考察した。第一節では、親鸞の示した「宿善」と蓮如の示した「宿縁」について考察した。親鸞の「宿善」は『歎異抄』にのみ示されており、「悪業」の対照的な言葉として「宿善」が述べられている。蓮如の「宿縁」は多く見られ、一般的な「宿縁」、蓮如の示す「宿善」、親鸞の「宿縁」の意味合いで使われており、そのどれもが、他力のはたらきによるものであるという意味合いが含まれていると考察した。第二節では、親鸞の「宿縁」と蓮如の「宿善」の違いについて考察した。それぞれ同じ慶びと感動を示した言葉だが、蓮如は他の意味合いでも使用していると考えられた。しかしそれらは、真宗教団の宗主という立場から「十劫安心」や「善知識だのみ」などの異義に対するものであり、根本には、慶び、感動が含まれている。

以上、親鸞の「宿縁」と蓮如の「宿善」について考察し、慶びと感動が明らかになった。七祖や覚如などの「宿縁」「宿善」について研究することで、親鸞、蓮如の「宿縁」「宿善」がより明らかになると考えられるため、今後の研究の課題としたい。

註

- 1 本多弘之『新講 教行信証―総序の巻』樹心社、二〇一六年、二一五頁
- 2 同右、二二七頁
- 3 同右、二二八～二一九頁
- 4 安富信哉「親鸞の値遇感―『教行信証』総序を中心に―」『眞宗研究』四二、一九九八年、五一頁
- 5 同右、五三頁
- 6 本多弘之『新講 教行信証―総序の巻』、二二六頁
- 7 同右、二二七～二二八頁
- 8 石田慶和『教行信証』論考：「権化」と「宿縁」『人文論叢／京都女子大学人文学会編』、一九、一九七〇年、

一七九頁

⁹ 神戸和麿・小野蓮明・安富信哉『親鸞の教え―教行信証。総序に聞く―』同朋舎出版、一九八八年、二七〇頁

¹⁰ 藤元雅文「宿業」の思想的意義についての一考察『親鸞教学』一一三、二〇二一年、三五―三六頁

¹¹ 同右、三六頁

¹² 源哲勝『業の認識と弥陀の救済』教育新潮社、一九六三年、一九一―一九二頁

¹³ 藤元雅文「宿業」の思想的意義についての一考察（三七頁）

¹⁴ 本多弘之『新講 教行信証―総序の巻』、二三六―二三七頁

¹⁵ 同右、二三〇頁

¹⁶ 一楽真「蓮如における宿善」『親鸞教学』、七一、一九九八年、二四頁

¹⁷ 稲城選恵『蓮如教学の研究2 宿善編』法蔵館、一九九四年、一一二頁

¹⁸ 同右、一一三頁

¹⁹ 同右、一一三頁

²⁰ 一楽真「蓮如における宿善」二六頁

²¹ 稲城選恵『蓮如教学の研究2 宿善編』一一九頁

²² 一楽真「蓮如における宿善」二八頁

²³ 稲城選恵『御文章概要―蓮如教学の中心問題―』百華苑、一九九〇年、三八九―三九〇頁

²₄ 同右、二五四頁

²₅ 鎌田宗雲 蓮如上人と『御文章』百華苑、一九五五年、一二三頁

²₆ 稻城選恵 『蓮如教学の研究2 宿善編』一六四頁

²₇ 桐溪順忍 「宿善他力の論理」『真宗學』、二二、一九六〇年、二七頁

参考文献

書籍

稻城選恵 『御文章概要―蓮如教学の中心問題―』百華苑、一九九〇年

稻城選恵 『蓮如教学の研究2 宿善編』法蔵館、一九九四年

金子大栄 『教行信証講読 教行卷』春秋社、一九八一年

鎌田宗雲 蓮如上人と『御文章』百華苑、一九五五年

神戸和麿・小野蓮明・安富信哉 『親鸞の教え―教行信証。総序に聞く―』同朋舎出版、一九八八年

業問題専門委員会 『業の問題』本願寺出版社、一九九〇年

浄土真宗本願寺派総合研究所 『浄土真宗聖典全書二 宗祖篇上』本願寺出版社、二〇一二年

浄土真宗本願寺派総合研究所 『浄土真宗聖典全書五 相伝篇下』本願寺出版社、二〇一四年

浄土真宗本願寺派総合研究所『浄土真宗聖典―註釈版 第二版―』本願寺出版社、二〇一六年

玉木興慈『歎異抄のことば』本願寺出版社、二〇一五年

廣瀬晃『親鸞の宿業観』法蔵館、一九九四年

本多弘之『新講 教行信証―総序の巻』樹心社、二〇一六年

増谷文雄『業と宿業』大進堂、一九八六年

源哲勝『業の認識と弥陀の救済』教育新潮社、一九六三年

論文

石田慶和『教行信証』論考：「権化」と「宿縁」『人文論叢／京都女子大学人文学会編』一九、一九七〇年

一樂真「蓮如における宿善」『親鸞教学』七一、一九九八年

桐溪順忍「宿善他力の論理」『真宗學』二二、一九六〇年

玉木興慈「親鸞における獲信者の研究―信巻真仏弟子釈を中心として」『印度學佛教學研究』四四、一九九六年

玉木興慈「親鸞における報恩の意味」『印度學佛教學研究』四五、一九九六年

藤元雅文「宿業」の思想的意義についての一考察『親鸞教学』一一三、二〇二一年

森本光慈「親鸞聖人における宿縁の意義」『行信学報』一九、二〇〇六年

安富信哉「親鸞の値遇感―『教行信証』総序を中心に―」『真宗研究』四二、一九九八年

山本攝「蓮如上人の宿善論」『行信学報』九、一九九六年